笠女郎の歌にみる独自の表現と先行歌人

吉野和子

はじめに

万葉集において笠女郎は歌人窪田空穂をして「知性の持つ強さと、感性の持つ柔らかさを兼ね備へてゐる人で、それが融け合つてゐるといふ趣を持つた人である。同時に歌才の豊かな人で、充実し、緊張した感を、余裕を持つて細かく現し得る人で、歌人として集中でも傑出した一人である」[1]と、端的に評されているように、集中異彩を放つ注目される歌人である。

しかしそのわりに人麻呂や笠女郎以前の歌人との具体的な比較や笠女郎独自の表現などの研究は部分的にしかなされていないように思われる。

この稿においては従来論議されてきた歌群の構成、歌と恋の進展具合の吟味、恋の段階と心理の詮索などには一切触れない。「一」において笠女郎の歌のみに見られる語句、また作者と作歌事情から明らかに笠女郎以後に作られた歌との共通の語句（笠女郎初出と言える語句）を列挙して、笠女郎の表現の開拓性、独自性を考察する。また「二」において作者名から明らかに笠女郎以前の歌と確定できる歌、具体的には人麻呂作歌と人麻呂歌集の歌、大伴旅人、山上憶良とその周辺の歌と笠女郎の歌との共通の語句をいくつか選んで取り上げ、それらが笠女郎の歌の中でどう使われ、どう工夫されて笠女郎の歌の表現となっているかを探ってみたいと思う。

始めるにあたって笠女郎の歌の作られた時期を簡単に確認しておく。笠女郎の歌は全部で二十九首ある。巻三の比喩歌に三首、巻四の相聞歌に二十四首、巻八の、春と秋の相聞に一首ずつである。これら巻三、四、八はほぼ年代順に並べられており、前後の歌との関係から笠女郎の歌は天平五年頃のかなり短い期間に作られたということはほぼ認められている。

一　笠女郎がはじめて歌に使った語句

笠女郎が初めて歌に詠み込んだ単語と句（五音、七音）は以下の通りである。＊印以下は大伴家持、坂上郎女、湯原王、大伴池主、遣新羅使等、防人の歌で、いずれも笠女郎以後に詠まれたことは明らかである。（坂上郎女には笠女郎以前の歌もあるが、当該歌は巻四と巻八に収められている歌で、その置かれている位置から笠女郎

の歌より後の作であることがわかる）

託馬野（③395）　いまだ着ずして（③395）
真野の草原（③396）　結びし心（③397）
わが形見見つつ偲はせ（④587）　打廻の里（④589）
待てど来ずける（④589）　知るれや（④591）
夕陰草（④594）　全けむ限り（④595）
八百日行く（④596）　沖つ嶋守（④596）
山川も隔たらなくに（④601）　心ゆも我は思はずき（④601）
なかれ（④606）　鐘（④607）　大寺（④608）
※この月ごろ（④588＊坂上郎女④723⑧1560）
立ち嘆く（④593＊遣新羅使等⑮3580）
間近き（④597＊湯原王④640⑥986）
物思（④602＊池主⑲4189　4425）
後（④608＊防人⑳4326）
鴨の羽色（⑧1451＊家持⑳4494）
朝ごとに（⑧1616＊家持⑱4122）

以上のように万葉集において笠女郎により初めて歌の中に使われた語句、時に二句に渡る表現は合計二十三におよぶ。女郎の二十九首の歌のうち、十九首において女郎が初めて用いた語句が使われていることになる。今、ここではひとつひとつの検討を記す余裕はないが、いくつか取り上げてみたい。これらの語句はそれぞれの歌の中でイメージを具体化し、作者の実感のこもる表現として現代の我々にも訴える大きな力を持っている。この中には女郎以前の万葉集において使われている表現を意図的に変えて新たな表現を試みているものもある。

託馬野に生ふる紫衣に染めいまだ着ずして色に出でにけり（③395）

たとえば、この歌において「いまだ着ずして」は、笠女郎以前の歌において似たような意味で「いまだ着ねども」（人麻呂歌集⑦1296）「いまだは着ねど」（沙弥満誓③336）と詠われている。しかし笠女郎は「ど」「ども」の不確実、不確定、あいまいさを残す表現ではなく「いまだ着ずして（全く着てもいないのに）」ときっぱりと言い切る表現を使っている。そして「いまだ着ずして」という断言的な表現と「色に出でにけり」の気づきと詠嘆を表わす「けり」とがぴったりと呼応して「まだ着てもいないのに、なんともう人目に立ってしまったのか」と、女郎の驚き（呆れ）の実感に近い表現にしている。「着ねども」では出せない趣であろう。

衣手を打廻の里にある我を知らにと人は待てど来ずける（④589）

この歌の「待てど来ずける」は耳慣れない表現だが似た表現に「待てど来まさず」がある。憶良作かと言われる志賀白水郎の歌（⑯3860）や手持女王の歌（③418）で笠女郎以前にすでに使われている。しかし笠女郎はあえて「来まさず」と敬語を使った表現ではなく、気づきの「けり」を使って「来ずける」とし、「こんなに

近くに私がいることを、そうか、知らなかったのか、だからあの人は来なかったのか」と、他に例のない、新たな表現を試みている。打廻の里は唯一の例で固有名詞ではなく「ほんのすぐそこの」という意味を込めた笠女郎の造語と言われているのは当っていよう。

朝ごとに我が見るやどのなでしこが花にも君はありこせぬかも（⑧1616）

「朝ごとに」は二例のみで使われている。他の一例は家持の歌で、巻十八において「安佐其登爾」と一字一音表記で使っている。女郎の原文は「毎朝」である。毎朝という意味では「あさなさな」というやまとことばがあり、人麻呂の二例を初めとして憶良（⑤904）家持（③408）池主（⑰4010）の他、作者未詳歌にも多く、全部で十五首に見られる。このように人麻呂から後期の歌まで「あさなさな」が使われている中で、笠女郎はあえて「朝ごとに」を用いているのである。毎朝自分の庭に咲くなでしこの花を見ながら「ああ、この花が家持さまであったらなあ」とつぶやく。「あさなさな」とさらりと表現してしまうのではなく、すでに人麻呂らによって「見るごとに」「八十隈ごとに」などの語に使われていた「ごとに」を使って「朝ごとに」とすることにより、朝が来るたびに、来る朝来る朝、その朝ごとになでしこの花を見ては家持の不在を実感したことがより強く表現されている。女郎がいかに自分ならではの表現、より自分の気持ちに近い表現にせまろうとしたかが見てとれる。

わがやどの夕陰草の白露の消ぬがにもとな思ほゆるかも（④594）

「ゆふかげ」は「暮陰　夕陰　夕影」として漢語にある。「ゆふかげ草」は笠女郎の造語であるという従来の説のごとくであろう。実在する草ではない。消え入らんばかりの思いを夕暮れの薄暗い陰に生えている草の、しかもその草に置くはかない露に例えている。人麻呂歌集に「水陰草（⑩2013）」があり、これも天の川に生えている草で実在しない。造語にも人麻呂の影が感じられる。「ゆふかげ」は笠女郎以後の田村大嬢（⑧1622）家持（⑲4290）と作者未詳歌に三首（⑩2104　2157　2159）ある。

なお笠女郎と作者未詳の巻七、十、十一、十二にのみある歌、およびこれらの巻の歌と作歌事情から明らかに天平五年以降の歌にのみ使われている語句はまだ十例ほどある。筆者はこれらの作者未詳歌巻は天平五年以降、万葉四期の歌を多く擁していると考える。しかしこれらの巻にある歌を四期以降とすることは現在の通説に反する。今のところ筆者には通説に反論できる用意はないので、これらの語句を笠女郎の初出として論ずることは不可能である。

二　笠女郎以前の歌人と共通の語句と表現

笠女郎より前の歌人で、笠女郎がもっとも多くことばを共有しているのは、柿本人麻呂である。作歌、歌集歌あわせて約四六〇首、圧倒的に歌数が多い人麻呂であるから当然の結果ともいえるが、あらためて人麻呂がいかに多くのことばや概念を歌に定着させたかが認識させられる。ついで山上憶良。憶良以前の作者では人麻呂が圧

倒しており、わずかに弓削皇子（「痩す」「ありこせぬかも」）、藤原宇合（「忘れかねつも」）がある。その他には大宰府以降の大伴旅人、余明軍、丹生女王があげられる。

以下、特徴的なことばを具体的に取り上げて検討したい。

Ⅰ　人麻呂が使っていることば

1　おもかげ

陸奥の真野の草原遠けども面影にして見ゆといふものを（③396）

夕されば物思まさる見し人の言問ふ姿面影にして（④602）

笠女郎は二首に「おもかげ」を用いている。

万葉で最初に見られるのは人麻呂歌集（一例のみ）においてである。

今作る斑の衣面影に我に思ほゆいまだ着ねども（⑦1296）

「おもかげ」は万葉集全体では十四首に使われている。全体に面影に見るのは妹や子ら、「妹のゑまひ」であって画一的である。笠女郎が面影として見るのは「陸奥の真野の草原」であり、「見し人（家持）の言問ふ姿」である。「真野の草原」は集中唯一の例で、真野は都から陸奥国の国府、多賀城への通り道にあたる。（現在の南相馬市）[2] この当時の人々にとっての陸奥は実感として現在よりはるかに遠い所であったであろう。「そんな地の果てのような陸奥の真野の草原でさえ、遠いけれども面影にして見えてくるのに、近くにいるはずのあなたが一向に見えてこない」と、もどかしさを訴える。また倒置法を使った602歌では「夕方になるとひとしお物思いがつのります。愛しい家持さまが私に話しかけてくださるお姿が心に浮かんで」と詠う。心に思い浮かべる「面影」は、ただ顔とか姿ではなく、「言問ふ姿」なのである。具体的であり、動きのある映像であって、より個人的な体験としての歌になっている。

また人麻呂歌集の歌では「面影に見ゆ」であるが笠女郎は「面影にして見ゆ」である。岩波古語辞典によると、「にして」の「し」は「有り」の意の古語であるという。「面影にして」は「面影にあって」の意となろうか。新日本古典文学大系『萬葉集』では「面影に浮かんで」と訳している。面影がより印象として強調され、情景や姿を具体的に浮かび上がらせている。

笠女郎は人麻呂歌集の歌の「面影」ということばに刺激を受けて、自分の歌にとりいれようとしたと考えられる。しかし面影ということばを拝借しただけでなく、当時役人の移動などで広がり始めていた地方の風物を巧みに取り入れて比喩とする方法も人麻呂の歌から学んだと思われる。[3] 都人には遠い、しかしややロマンをかきたてて人々の口に上ったであろう陸奥という地方を取り上げその景として想像を広げ、しかも一面のすすきの原という容易に心に描ける具体的な物に焦点をあてて比喩としている。

2　かたみ

わが形見見つつ偲はせあらたまの年の緒長くわれも思はむ（④587）

「かたみ」は集中二十四例ある。うち人麻呂作歌に四例、人麻呂歌集歌に三例ある。亡くなった人を偲ぶ歌の中で五例、不在の相手をしのぶ歌に二例である。人麻呂が好んで使ったことばといえる。また「かたみ」の指すものは衣が八例、植物が六例、場所が四例、残された子ども、鏡が各二例、ただ「もの」とあるのが一例である。二十四例のうち、人麻呂歌集の旋頭歌（⑦1276）と志貴皇子への金村の挽歌の或本歌（②233）では「形見」と「見つつ偲ぶ」が一首の中に使われている。

池の辺の小槻が下の篠な刈りそねそれをだに君が形見に見つつ偲はむ（⑦1276）

高円の野辺の秋萩な散りそね君が形見に見つつ偲はむ（②233）

この二首は下二句「君が形見に見つつ偲はむ」が全く同じであるだけでなく植物（篠、萩）を君の形見とし、それを見て偲ぶので刈らないでくれ、散らないでくれという表現も似ている。これぞ類歌といえるだろう。志貴皇子が没したのは霊亀元年（715年、続日本紀によると二年）であるから平城遷都以前に没したといわれる人麻呂の旋頭歌が先行している。

「形見」を見て不在の相手を偲ぶのはごく当たり前のようであるが、万葉集の中に「形見」と「見つつ偲ぶ」が並列して詠われているのはこの二首と笠女郎の歌しかない。また同じ「形見」と「見つつ偲ぶ」ではあるが、笠女郎の587歌では「君が形見」ではなく「わが形見」であり、形見を見て偲ぶのは自分ではなく相手である。相手に「見つつ偲はせ」と敬語ではあるが命令している。二十四例の「形見」において誰の形見であるかを見てみると、「妹・吾妹子」（十一例）、「君・吾背子」（六例）あわせて相手の形見を詠うのが十七首、第三者である「吾王・母」の形見として詠うのが各一首で、自分の形見を詠うのは当該歌を含めて五首である。そのうち三首は「わが形見」ということばは使っていない。笠女郎以後の湯原王（④636）狭野弟上娘子（⑮3753）中臣宅守（⑮3765）の歌である。「吾形見」を使っているのは次の一首である。

まそ鏡見ませ我が背子わが形見持てらむ時に逢はざらめやも（⑫2978）

新日本古典文学大系本によれば鏡には人の魂や姿形が宿るという古代の思考にのっとり、「あなたがこの形見を手に取りさえしたら、鏡の中に宿る私の姿にいつでも逢えるではないか」という歌であるとする。形見の鏡を渡しながらやさしく相手を慰めている。

一方、笠女郎は形見が何であるかには全く触れず、いきなり「わが形見」と詠いだし、「見つつ偲ばせ」と、上二句で一文を完成、「私が差し上げたあれ、私の形見として、それを見て私を思い出して」と、嘆願、いや命令している。そして下句で「私もいつまでもずっとあなたのことを思い続けます」と自分の気持ちをそえている。自分の形見として相手に差し出す歌で、先にあげた湯原王の歌がある。

我が衣形見に奉るしきたへの枕を離けずまきてさ寝ませ（④636）

この歌では自分の衣を相手に奉って、枕から離さず身にまとってお休みくださいと、別れに際して形見の衣を差し出しながら丁寧なことばで相手をなだめるような歌になっている。この歌と比較してみても笠女郎の歌の大胆な表現が浮き彫りにされよう。

3　恋ひ渡る

うつせみの人目を繁み石橋の間近き君に恋ひわたるかも（④597）

朝霧のおほに相見し人ゆゑに命死ぬべく恋ひわたるかも（④599）

伊勢の海の磯もとどろに寄する波畏き人に恋ひわたるかも（④600）

「恋ひ渡る」は五十二首に使われている。人麻呂歌に一首（②200）人麻呂歌集歌に九首あり、人麻呂以前にはない。このうち「恋ひ渡るかも」と結句で結ぶ歌は全体の半数、人麻呂作歌に一首、人麻呂歌集歌に五首あり、笠女郎に三首ある。「恋ひ渡る」は、思いの丈を歌にして家持に贈っても、あまり報われなかった笠女郎のキーワードといえるかもしれない。人麻呂の恋ひ渡る状況は「日月も知らず」「夜昼といはず」「逢はぬ日まねみ」「千重しくしくに」「根深めて」「人に知らえず」と、さすがに形容はさまざまであるが画一的ともいえる。これに対して笠女郎の恋い渡る状況は「川の流れに渡した石の橋をポンと渡る、それほど近くにいるあなたなのに人目が多くて逢えないもどかしい気持ちで」（597）また「朝霧に包まれているようにほのかにお逢いした人だからこのままでは死んでしまうかと思うほど」（599）「神の国、伊勢の海の岩場にドドーンとうち寄せる波のように恐れ多く図りがたい人に恋してしまったと自嘲的な思いで」（600）と、状況や心持を具体的にことばにして、「恋ひ渡るかも」と詠嘆の気持をこめて片時も頭を離れず恋い続けている自分を描いている。

4　わが恋ひ渡る

白鳥の飛羽山松の待ちつつそ我が恋ひわたるこの月ごろを（④588）

「恋ひ渡る」三例の他にもう一例、「吾恋ひ渡る」がある。「私、ずうっと恋いしたって思い続けているんです」と、「わが」を添え、私を強調しているのだが、全体では六例、人麻呂歌集歌に一例ある。

千沼の海の浜辺の小松根深めて我恋ひわたる人の子ゆゑに（⑪2486）

序詞の松から人麻呂は「根」を、笠女郎は「待つ」を縁のことばとして導き「わが恋ひ渡る」につなげている。「待ちつつ」は人麻呂が死に臨んで詠んだ歌「鴨山の岩根しまける我をかも知らにと妹が待ちつつあるらむ」（②223）にある。

「恋ひ渡る」を使う歌は集中五十二首もあるが、「この月ごろを」と、恋いしく思い続けている期間まで歌にしているのは笠女郎のみである。女郎はここ数日でもなく、数週にわたってでもなく、もう幾月もの間、家持の訪れを待ちながら恋しい思いを抱き続けている

と言う。具体的な表現であり実感がこもっている。そして「わが恋ひ渡る」とすることで、そうした状況の自分を客観的に見ている様子がわかる。類型的な恋歌から個人の思いの発露として進化させているのだ。「根深めて」(③397⑪2486)「白鳥の」(④588⑨1687)は人麻呂歌集歌と笠女郎のみが使っている。

5　君に恋ひ

君に恋ひいたもすべなみ奈良山の小松が下に立ち嘆くかも（④593）

「君に恋ひ」を初句に置く歌は六例ある。作者、出典のわかる歌は人麻呂歌集に一例（⑪2409）と余明軍の、旅人が没した時の歌（③456）にある。

君に恋ひうらぶれ居ればくやしくもわが下紐の結ふ手いたづらに（⑪2409）

君に恋ひいたもすべなみ蘆鶴の音のみし泣かゆ朝夕にして（③456）

笠女郎の歌は余明軍の歌と上二句が同じである。上二句が同じなのはこの二首のみである。不在の家持を恋い慕う笠女郎の気持ちは亡くなった旅人を慕う資人、余明軍の気持ち「あなたが恋しい、恋しくてどうしようもない」と重なるものがある。恋しい思いを抱いて「うらぶれ居る」のではなく「いたもすべなみ」なのである。そしてどうしようもないながら、せめて家持の家の近くにと、奈良山に行き、小松の下に立って嘆くのである。なぜ小松の下なのか。旅人が没した時、余明軍が比喩歌（③394）において家持のことを小松にたとえていることが頭にあった可能性は否定できない。

ちなみに「君に恋ひ」を初句に持つ残りの三首は巻十と巻十一にあり、「うらぶれ居れば」(⑩2143)「萎えうらぶれ　我が居れば」(⑩2298)「寝ねぬ朝けに」(⑪2654)であって「いたもすべなみ」と続く歌はない。「いたもすべなみ（どうしようもなく、じっとしていられず）」に続く下三句は家を出て奈良山まで歩くという動きを想像させる。そしてその歩みは小松の下でぴたっと止まる。焦点を合わされた小松の下には笠女郎が立っている。「立ち嘆く」は「立つ」と「嘆く」の複合語である。ただ立っていたのではなく、ただ嘆いていたのでもない。小松の下に立ち、あるいは幹に触れ、あるいは枝を見上げて家持の存在を感じつつ、不在を嘆いていたのである。

6　死にす

恋にもそ人は死にする水無瀬川下ゆ我痩す月に日に異に（④598）

念ひにし死にするものにあらませば千度そわれは死にかへらまし（④603）

天地の神の理なくはこそ我が思ふ君に逢はず死にせめ（④605）

「死にす」は岩波古語辞典によると「死ぬことを為す意」とあり、つまり死ぬということであるが、「死ぬ」よりも死が強調された強いことばである。全体では八首に使われており、人麻呂歌集に一首

と、中臣宅守（⑮3740）作者未詳歌（⑪2572 ⑬2928 ⑯3852）にある。これを笠女郎は三首の歌に使っている。なかでも603歌は人麻呂歌集歌の「死にす」を使った歌の類歌であると指摘されている。

恋するに死にするものにあらませば我が身は千度死にかへらまし（⑪2390）

一見するとほとんど同じ歌のようにも見える。この二首については八木京子氏[4]、稲岡耕二氏[5]がすでに考察されているのでここでは詳しくは触れない。つまり一見すると603歌と2390歌は表現が酷似していて類歌であると片付けられてしまいそうだが、人麻呂歌集の歌は「世間では恋をすると『ああもう死にそう』などと言うけれど、もし恋するたびに死んでしまうとしたら僕なんか死んでは生き返り死んでは生き返り……千回も繰り返すことになるだろう」と解することができるとすると、同じ構図を借りながらほんの少しのことばを変えるだけで笠女郎はみごとに後述のように自分の思いを盛り込んだ歌にしてしまった。つまり「人間というものが念いによって死ぬことがあるとしたらこんなに一途に家持のことを思い続けている私は死んでしまうだろうが、何度死んでも、千回でも繰り返し生き返って私は思い続けるだろう」となるのである。わずかにことばを変えるだけで言わんとする趣旨はまるでちがう。笠女郎の歌作への挑戦的意図さえ感じてしまう。

また598歌の「恋にもそ人は死にする」は人麻呂歌集歌の上三句「恋ひするに死にするものにあらませば」に答えるような歌になっている。「『死にするものにあらませば』だなんて何をおっしゃいます、恋いしい念いによって人は死ぬのです」と、きっぱりと宣言している。「水無瀬川も人には見えないでしょうが下には水が流れているように、少しずつ少しずつ日に日に私は痩せていってこのままでは死んでしまいます。恋いしい念いのせいで人は死ぬことはあるのです」と詠う。この歌が人麻呂歌集の「恋するに死にするものにあらませば」という上三句をきっかけとして生まれたのではないかと見るのはよみすぎだろうか。

Ⅱ　人麻呂以外の先行歌人が使っていることば

人麻呂と笠女郎の共通のことばの主なもの、特徴的なことばを選んで考察してきたが、人麻呂以外の先人のことばも笠女郎は積極的に取り入れている。主なものを挙げていく。

1　ことわり

天地の神の理（ことわり）なくはこそ我が思ふ君に逢はず死にせめ（④605）

「ことわり」は万葉集の中では憶良が「或へる情を反さしめる歌」（⑤800）の中で使っている。憶良は「父母を見れば尊し妻子（めこ）見ればめぐし愛（うつくし）し」と思うことが「世の中のことわり」であるという。国守たる憶良が人民の間違いを正す、説教の長歌である。この硬いことばを笠女郎は短歌に使っている。笠女郎以後の「ことわり」は三例、中臣宅守（⑮3761）家持（⑱4106）坂上郎女（⑲4220）で作者未詳歌にはない。いずれも「世のことわり」として使っている。

笠女郎の「ことわり」は「天地の神のことわり」とある。「天の神、地の神に道理というものがなければいざ知らず、そんなことはありえないからきっとこのまま死ぬまで私の愛しい人に逢えないということはないにちがいない」と、これはもう神を持ち出してひらきなおって確信している。「神」は三百首ほどに詠まれているが「神のことわり」を詠うのは唯一である。天神地祇の身近であったこの時代に「天地の神の理なくはこそ」という歌い出しは人をひきつけるに充分であったであろう。この歌にも前項の「死にす」が使われている。

2　ぬかつく

相思はぬ人を思ふは大寺の餓鬼の後（しりへ）に額つくごとし（④608）

「ぬかつく」は憶良と笠女郎以外は使っていない。憶良は長歌「恋男子名古日歌（⑤904）」の中で古日の無事を、天つ神を振り仰ぎ国つ神に伏して額づき、祈っている。祈る姿としては普通の姿であろう。一方、笠女郎は思い人家持に対して思いを募らせるばかりで一向に報われない自分の姿を餓鬼のしりへに額づくようだと、自嘲的に詠う。用いていることばだけでなく発想においても独創的で他に例を見ない。餓鬼は餓鬼道に落ちた亡者のことだが「大寺の」とあるので、筆者は仏さまを守る四天王が踏みつけている邪鬼を想像してしまう。仏さまにではなく、四天王にでもなく、踏みつけられている邪鬼のしかもその後ろから額を床に付けてお願いしているようなもの、とそのご利益などとうてい望めない、あわれな自分の姿を笑いものにしている。

3　心ゆも

心ゆも我は思はずき山川も隔たらなくにかく恋ひむとは（④601）

心ゆも我は思はずきまた更にわが故郷に帰り来むとは（④609）

「心ゆも」を笠女郎は二首に用いている。作者未詳歌も含めて全五例あるが、いずれも「思ふ」につなげて使われている。笠女郎以前の歌としては憶良の長歌、「日本挽歌」に「……年月もいまだあらねば心ゆも思はぬあひだに」（⑤794）があり、憶良以前の吹芡刀自に「真野の浦の淀の継橋心ゆも思へや妹が夢にし見ゆる」（④490）がある。また作者未詳歌に一首（⑦1354）あって全五例である。「思ふ」のはことわらないかぎり主語は一人称であるが、笠女郎はことさら「我は」を入れ「思へや」「思はぬあいだに」といったあいまいな表現ではなく「思はずき」（私はまったく思いもしなかった）といい切っている。しかもこれは述部にくることばであるから普通の語順からいけば結句にくるはずであるが二首ともに初句において用いている。「まったく思いもしなかったなあ」とまず感慨を初句において、あとにその驚きの感慨の内容を「かく恋ひむとは」「帰り来むとは」と倒置して結び、強調している。この二句「心ゆも我は思はずき」は集中女郎のみの使用で万葉集では以後使われなかったが、やがて平安以降には「思ひきや」と一語に集約されて用いられていることは多く指摘されていることであり、古今集を初めとして勅撰集の七五首に使われている。

4　あに

八百日行く浜の沙も我が恋にあにまさらじか沖つ島守（④596）

「豈」は旅人に二首、笠女郎に一首あるのみである。旅人の「豈」は二首とも賛酒歌にある。

価なき宝といふとも一杯の濁れる酒にあにまさめやも（③345）

夜光る玉といふとも酒飲みて心を遣るにあにしかめやも（③346）

笠女郎の歌は八百日もかけて歩くほど長い砂浜の砂の量と自分の恋しい思いとを比べて「それだけ多量の砂の量もわたしの恋の思いにどうしてまさることがあろうか」という。笠女郎は旅人のみが使っている「あに」という確信をもって打消または反語を導く副詞を使い、「まさらじか」と、打消の推量「じ」と疑問の「か」で結んで「とてもとてもかなわないであろうよね」と沖の島守に共感を求めている。

まとめ

笠女郎は人麻呂、憶良など先人の歌を目にしていた、というより深く読みこなしていたと思われる。家持に魅かれ恋する気持ちを歌に託そうとする時、おのずと先人の歌が浮かんでくるほどに先人の歌、いや歌そのものをも愛していたにちがいない。家持に恋をして、その気持ちを届けるために恋の歌を作ろうと、あわてて先人の歌集をひもといた……のではない。自分の気持ちをより忠実に、より印象深く歌に託そうと模索する中、先人によって詠まれたことばをただ拝借するのではなく、自分自身の感性でことばを選び、新たな解釈を加えて自分の心に沿う歌を作りたいと思ったにちがいない。単語だけでなく、比喩の取り方、歌にする題材まで先人、特に人麻呂から多く示唆を受けていることは見てきたとおりである。大胆な前提を初句にもってきて人を引きつける人麻呂の手法は603歌　605歌に使われている。また作者の思いの結論を初句にもってくる人麻呂の手法（⑪2377・2389・2394）も笠女郎は多用している。（④587・598・601・602・606・609）

笠女郎と人麻呂の語句の重なりはここで取り上げた以外にもあり、全部で二十例をこす。それらの語句は巻二の作歌と巻七、九、十、十一に人麻呂歌集の歌としてあるものである。また旅人、余明軍の歌は巻三に、憶良の歌は巻五に収録されている。巻三は天平十六年の歌を収録しており、編纂されたのはそれ以後であるから、笠女郎が目にしたのは『万葉集』として編纂される前の状態であったことはまちがいない。人麻呂歌集もそれぞれの巻に編纂される前のものであった可能性も考えられる。今後の課題となろう。

笠女郎は人麻呂らの開拓したことばや表現に満足することなく、自分の心をより深く表現すべく、詠み方に工夫をくわえた。そして今まで歌の題材になりえなかった大寺、鐘、沖つ嶋守などを歌にとりいれ、「八百日行く浜のまさご」「伊勢の海の磯もとどろに寄する波」などという斬新な例えを用い、夕陰草、打廻の里ということばまで作り出している。また「来ずける」「……なかれ」「心ゆも我は思はずき」など曖昧さを廃してきっぱりと言い切る表現を工夫して

いる。ことばの工夫により、一首に盛り込まれた情報量が多いことも特色である。まさにそれ以前の和歌の固定観念を破り、新たな表現を生み出しているのだ。歌を自身の「個」の発露の道具として最高に生かしきった歌人と言えるだろう。

引用した万葉歌は『新日本古典文学大系　萬葉集』一九九九・五・二〇　第一刷（岩波書店）による

注1　窪田空穂『万葉集評釈』第三巻　p・154　昭和60年2月25日　新訂初版　東京堂出版

2　史跡真野古墳群周辺は陸路水路の結節点で弥生時代から平安時代までの重要な遺跡が集中しているという（文化庁『発掘された日本列島20 19』この部分の記事担当 川田強　2019・6・3　共同通信社）

3　たとえば「み熊野の浦の浜木綿百重なす心は思へどただに逢はぬかも」（万葉集巻四 496）などがその例となろう。

4　八木京子「笠女郎の文字『死変』」日本女子大学紀要文学部52号

5　稲岡耕二『萬葉集全注』巻第十一　p・116　平成10年9月20日　初版　有斐閣

（よしの・かずこ　平成五年度大学院博士後期課程満期退学）